

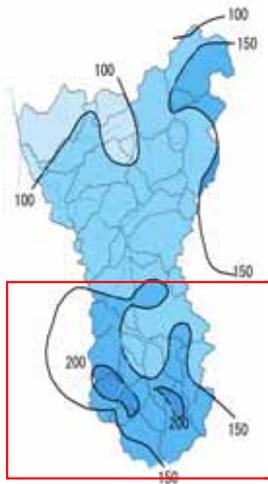
## 4. 水害と治水事業の沿革

### 4.1 既往洪水の概要

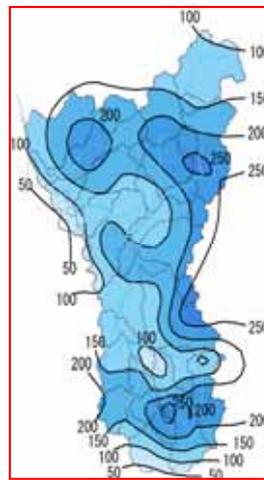
#### (1) 雄物川の洪水

##### 【流域の降雨特性】

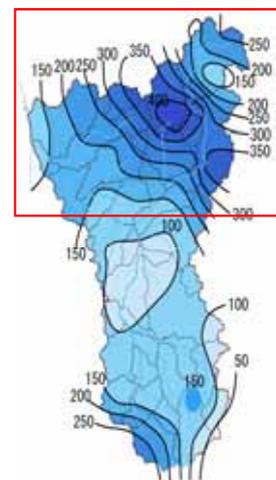
雄物川流域の洪水の原因となる降雨は低気圧を伴った前線性のものが多い。降雨分布は、本川上流域型、全流域型、玉川流域型に区分される。降雨の継続時間はほとんどが2日程度であるが、昭和44年7月洪水に見られるような4~5日も継続している洪水もある。なお、雄物川流域は積雪地帯であるため、毎年3月から5月にかけて融雪による洪水被害も発生している。



本川上流域型(S44.7洪水)



全流域型(S62.8洪水)



玉川流域型(S47.7洪水)

#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### 【出水の特性】

雄物川の上流部は右支川皆瀬川（皆瀬川、成瀬川）と、皆瀬川合流点上流（本川、役内川、高松川）とに分かれ、皆瀬川合流点においては洪水規模はほぼ等しく、両川のピークがほぼ重なる洪水が多い。従って合流点後の流量も大きい。その下流で本川と合流する西馬音内川、横手川、丸子川等は洪水規模も小さく、ピークもずれるため玉川合流点に至るまでの雄物川上流の洪水流量は本川、役内川、高松川、皆瀬川の流出によって支配されることが多い。

玉川合流点から秋田平野までの間は出羽山地の中を流れる狭窄部であり、河床勾配が緩いことから昭和22年7月洪水等においては、長期間洪水被害が継続している。

昭和22年7月洪水



昭和47年7月洪水



昭和62年8月洪水



表 4-1 明治以前の雄物川の洪水年表

西暦	年 号	種 別	記録
1618	元和 4 年	洪水	西明寺大洪水にて河流変る
1619	元和 5 年	洪水	6月角館洪水 13人溺死
1620	元和 6 年	洪水	久保田洪水
1622	元和 8 年	洪水	6月久保田洪水田園の毀損甚し
1632	寛永 9 年	洪水	6月大洪水一名自髭水と云う
1684	貞享元年	洪水	6月久保田大洪水
1687	貞享 4 年	洪水	角館洪水 4度あり
1689	元禄 2 年	洪水	6月久保田大洪水あり
1712	正徳 2 年	洪水	3月久保田洪水あり
1723	享保 8 年	大風雨	8月仙北大風洪水村落田園損害甚大久保田洪水
1724	享保 9 年	洪水	5月仙北雄勝大洪水
1728	享保 13 年	大洪水	7月久保田大雨城下洪水
1745	延享 2 年	洪水	玉川洪水
1748	寛延元年	洪水	4月秋田洪水
1755	宝暦 5 年	洪水	5月久保田大洪水
1758	宝暦 8 年	洪水	8月川欠(関上村、古川村)
1759	宝暦 9 年	洪水	閏7月7日川欠(関上村、古川村) 8月久保田洪水
1777	安永 6 年	大洪水	7月出羽奥羽大洪水 領内大洪水大雨9日水の高さ2丈5尺余流失家屋 116 潰家 135
1778	安永 7 年	洪水	当閏7月24日より8月12日迄雨降続川欠落橋倒木民家破損有之
1785	天明 5 年	洪水	玉川洪水
1791	寛政 3 年	洪水	8月久保田大洪水、大風、大地震あり
1801	享和元年	洪水	6月領内洪水家屋流失死者多かりし(南部史要に記載あれど本郷に伝え、 及史料なし)
1804	文化元年	洪水	6月久保田大洪水
1817	文化 14 年	洪水	6月久保田大洪水
1827	文政 10 年	洪水	久保田大洪水
1828	文政 11 年	洪水	6月11日大雨暑薄し、7月9日大雨7月8日大曲地方洪水
1847	弘化 4 年	洪水	7月29日大雷雨諸作宜しからず
1852	嘉永 5 年	洪水	5月4日大洪水、同27日再び大洪水6月13日しがふり(永) 同24日大洪水
1854	安政元年	洪水	6月13~19日大雨洪水諸作宜しからず 久保田大洪水、保戸野新橋及2、3丁目橋流失 6月17日角館大洪水(5月6日洪水多し)
1855	安政 2 年	洪水	大洪水
1856	安政 3 年	洪水	6月3日同14日洪水
1860	万延元年	洪水	5月24日~25日大雨洪水、堰所々次
1862	文久 2 年	洪水	6月12日洪水
1865	慶応元年	洪水	7月2~3日同17日大雨洪水

4. 水害と治水事業の沿革

表 4-2 明治以降の雄物川の洪水年表

西暦	年号	種 別	記 録
1869	明治 2 年	洪水	6月洪水
1874	明治 7 年	洪水	1月洪水
1878	明治 11 年	風水害	旧6月1日大雷雨大洪水被害多し 8月6日暴風連日、本日に至り市内及横手水害、横手特に甚しく家屋漂流するもの少からず溺死4名、8月6日大洪水
1882	明治 15 年	大風洪水	大風、洪水あり
1885	明治 18 年	洪水	旧3月下旬より出水腰廻橋流失死者2名
1892	明治 25 年	大洪水	8月23日早朝秋田市旭川の上流に大雷雨あり同川筋大氾濫して家屋流失、人畜の溺死等多く、市内の橋梁は唯1、2ヶ所の外全部流失したり雄物川筋道路破損164 堤防欠潰62 橋梁流失毀損36、米代川筋道路毀損10ヶ所、堤防切れ25ヶ所、橋梁流失投損18ヶ所
1894	明治 27 年	大洪水	8月25日雄物川筋及子吉川筋大雨氾濫し、稀有の大洪水となり仙北、平鹿、雄勝郡及び由利本荘附近はその被害激甚を極め、家屋の流出人畜の死傷等夥し被害市町村1市161町村、死者330人負傷163人行方不明4人死畜61頭、被害家屋全潰184戸、半潰672戸、破損7145戸、流失1410戸、浸水18947戸、浸水土地24418町歩、山崩11430ヶ所、道路被害3306ヶ所、橋梁5373ヶ所、堤防被害1188ヶ所、川除1508ヶ所、船舶160般、電柱81本、倒木259228本その他 雨量は秋田24日33.6耗、角館72.6耗、大曲50.0耗 水位は26日、相川9.32米、樺川3.94米、石田坂6.67米、新川橋6.50米、土崎3.64米 損失価格2,114,886円(S39換算2,762,253千円)
1896	明治 29 年	大雨水	9月5~10日台風により大雨あり雄物川甚しく氾濫被害面積22690町歩
1903	明治 36 年	大洪水	7月1~9日水害あり、同19日雄物川筋洪水堤防の破壊、橋梁の流失等被害あり、 7月20日水位 相川6.45米、樺川1.52米、石田坂5.39米、新川橋5.53米、土崎3.06米
1904	明治 37 年	大雷雨並	7月22日河川氾濫被害あり浸水土地13960町歩、河川堤防被害656間 8月1~2日電雷豪雨を催し降電(大きさ小豆大)を交え数ヶ所に落雷、1日17時鹿角郡曙村にて2名震死、2日16時河辺郡浜田村にて1名震死、仙北郡土川村明光沢の大堰欠潰し田地40町歩、畑地10町歩被害道路欠潰5ヶ所、橋梁流失3ヶ所、由利郡下郷村にて道路崩壊其の他の被害あり
1905	明治 38 年	洪水	9月12~22日氾濫被害あり
1907	明治 40 年	雪汁洪水	7月26~8月7日洪水被害あり 5月5~6日異常な暖気と降雨により県内各地に被害を生ず 岩見三内村=川除破損9ヶ所橋梁破損1ヶ所同流失5ヶ所、材木流失2、900尺貫 角館町=家屋浸水117戸全潰1戸大破1戸田地其他浸水107町歩、橋梁流失堤防破潰等あり 秋田市内=浸水多く川口橋落橋その他被害多し 日雨量は秋田5日47.6耗、角館87.0耗、横手46.5耗
1909	明治 42 年	洪水	8月28日洪水あり平鹿、雄勝両郡及南秋田郡下に被害あり、橋梁流失3、他浸水等
1909	明治 42 年	雪汁洪水	4月7日雄物川筋稀有の大洪水堤防の破損、橋梁流失、死傷者多数あり 岩崎小鉄橋陥落、刈和野峰吉問に於て連結貨物乗員と共に峰吉川受中に顛落す
1910	明治 43 年	雪汁洪水 豪雨洪水	4月19日横手町旭川及雄物川再度増水列車不通となる 3月27日南東の暴雨風山間の残雪急に融角して河水増高被害あり 8月12日雄物川上流地方に大豪雨同流域一帯に亘り多大の被害あり雄勝、平鹿、仙北、河辺四郡及秋田市に次の被害あり。 田地収穫皆無245.3町歩、5割以上減1383.7町歩、畑収穫皆無115.4町歩、5割以上減668.5町歩、死者21名、家屋全潰3戸、半潰43戸、流失91戸、浸水床上3060戸、床下2470戸、堤防決潰200 橋梁流失646、山岳崩壊40、土地流失埋没844町、浸水面積6614町

4. 水害と治水事業の沿革

西暦	年号	種 別	記録
1911	明治 44 年	洪 水	9月1日より3日に亘り大雨あり3日夜来雄物川筋再度の洪水となり特に秋田附近は稀有の大洪水となり近年無比の惨状を呈した 田地浸水 9397.2 反、畑地浸水 3412.5 反、宅地浸水 308.4 反その他浸水 814.3 反死者 3 名、海岸及港湾波止場破損 33 山崩 332 道路欠損箇所 168 同破損 367 河川堤防欠潰 157 同破損 187 橋梁流失 354、同破損 1135 家屋建物全潰 17 戸半潰 57 戸流失 5 戸、浸水床上 6455 戸床下 4313 戸刈和野水位 8.9 米 雨量は秋田で 9 月 1~3 日 281.5 耗、角館 2~4 日 390.0 耗、横手 174.6 耗 最主水位は沼館 5.88 米、大曲 5.36 米、刈和野 8.85 米、相川 8.92 米、椿川 3.60 米、石田坂 6.75 米、新川橋 6.65 米、土崎 2.85 米
1912	明治 45 年	洪 水	7月25~27日洪水被害あり 9月17日山本郡、由利郡、仙北郡、北秋田郡に浸水家屋を出せり 2月28日雄物川、米代川、旭川、玉川、馬場目川、子吉川氾濫浸水家屋を出せり 7月17日雄物川筋大雨のため洪水となり仙北、平鹿、雄勝郡及秋田市に於ける被害、浸水床上 384 戸、床下 1632 戸、雄勝郡橋梁流失 7 その他県下一般に浸水家屋を出せり 8月31日洪水被害あり 雨量は秋田で 7 月 16 日 35.8 耗、角館 66.3 耗、横手 35.2 耗 最高水位は沼館 4.12 米、大曲 6.67 米、刈和野 7.00 米、相川 7.59 米、椿川 2.53 米、石田坂 5.93 米、新川橋 5.91 米、土崎 3.16 米
1917	大正 6 年	大 雨 洪 水	7月4日雄物川筋大雨増水被害あり秋田市に於て床上浸水 220 戸床下 300 戸
1918	大正 7 年	大 雨 洪 水	8月15日全県下に亘って大雨、雄物川流域、子吉川上流、米代川支流、阿仁川流域等洪水のため大被害あり 雨量は秋田 14 日 170.9 耗、角館 16 日 200.0 耗、横手 17 日 58.7 耗 最高水位 沼館 3.31 米、大曲 4.73 米、刈和野 6.61 米、椿川 5.54 米
1920	大正 9 年	大 雨	7月7日玉川及米代川流域、大雨のため氾濫多大の被害あり、浸水家屋床上床下 90 余戸に及び浸水 2 日に及び、田畑浸水 340 余町歩、米代川本支流増水浸水 253 戸、田地浸水 640 町歩、溺死 3 名其他木材流失等あり
1921	大正 10 年	雪 汁 洪 水 洪 水	4月4日雄物川下流雪汁洪水のため秋田市に於て床上浸水 115 戸床下数百戸に及び土崎にて船 2 隻沈没、角間川町床上浸水 53 戸床下浸水 35 戸、その他の被害あり 4月5日椿川水位 8.72 米 7月6~8日洪水雷を伴う 7月7日雨量秋田 76.5 耗、角館 98.8 耗、横手 26.6 耗 7月8日椿川水位 7.04 米
1923	大正 12 年	雪 汁 洪 水 洪 水	4月25日雄物川雪汁洪水椿川水位 8.2 米 6月30日豪雨洪水被害あり、花館水位 5.8 米椿川 6.36 米 7月18~26日豪雨被害あり秋田市に於ける浸水床上 129 戸床下 389 戸、その他県下一般に亘り浸水家屋及橋梁流失堤防の決潰等多数あり 雨量は秋田 7 月 20 日 52.8 耗 角館 21 日 77.0 耗 横手 19 日 58.7 耗 25日椿川水位 9.06 米
1926	大正 15 年	大 雨 水 害	7月28~29日の両日雄物川筋大雨同流域出水氾濫多大の水害あり 30日椿川水位 7.75 米 8月2日より3日間に亘り雄物川上流及子吉川流域に大雨横手、本荘附近は稀有の水害を醸したり。横手町に於ける浸要家屋床上 425、床下 554 流失家屋 6、橋梁流失 4、その他由利、平鹿、仙北三郡に於ける田地浸水 2,700 町歩畑地 761 町歩 5日椿川水位 8.12 米 8月17日豪雨により子吉川、雄物川氾濫甚大な被害あり 本荘水位 4.9 米 18日椿川水位 7.30 米 雨量は秋田 8 月 5 日 47 耗、角館 3 日 113 耗、横手 4 日 128 耗 最高水位 阿気 2.91 米、刈和野 7.12 米

#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### (2) 近年の主な洪水

雄物川の水害は、昭和 22 年 7 月に過去最大の洪水が発生し、流域平地部の 60%が氾濫域となり、戦後の混乱期と相まってその被害は甚大なものとなった。また、人々の記憶に新しい洪水では、昭和 62 年 8 月洪水時に大仙市で家屋や主要生活道路が浸水するなど、中流部の無堤部に被害が集中した。

表 4-3 近年の主な洪水状況

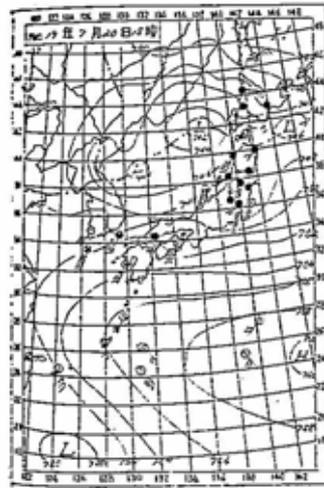
洪水生起年月	気象状況	基準地点楢川		被害状況
		流域平均 2日雨量 (mm)	ピーク流量 (m <sup>3</sup> /s)	
昭和 19 年 7 月	前線の停滞	222	約 6,440	死者・行方不明者 11 名、流出・全壊戸数 19 戸、 浸水家屋 7,279 戸
昭和 22 年 7 月	前線の停滞	241	約 8,460	死者・行方不明者 11 名、流出・全壊戸数 308 戸、 床上浸水 13,102 戸・床下浸水 12,259 戸
昭和 22 年 8 月	前線の停滞	158	約 5,880	死者・行方不明者 7 名、流出・全壊戸数 113 戸、 床上浸水 4,335 戸・床下浸水 7,631 戸
昭和 30 年 6 月	前線の停滞	156	約 4,720	死者・行方不明者 8 名、流出・全壊戸数 23 戸、 床上浸水 11,522 戸・床下浸水 21,067 戸、
昭和 40 年 7 月	前線の停滞	126	約 3,790	流出・全壊戸数 9 戸、 床上浸水 2,885 戸・床下浸水 10,162 戸、
昭和 41 年 7 月	前線の停滞	132	約 2,820	床上浸水 255 戸・床下浸水 1,181 戸
昭和 44 年 7 月	前線の停滞	142	約 3,300	床上浸水 158 戸・床下浸水 2,147 戸、
昭和 47 年 7 年	前線の停滞	182	約 4,150	流出・全壊戸数 4 戸、 床上浸水 1,465 戸・床下浸水 3,439 戸
昭和 54 年 8 月	前線の停滞	135	約 2,960	流出・全壊戸数 1 戸、 床上浸水 77 戸・床下浸水 1,001 戸
昭和 56 年 8 月	台風 15 号	126	約 3,280	床上浸水 2 戸・床下浸水 9 戸
昭和 62 年 8 月	前線の停滞	157	約 4,230	床上浸水 534 戸・床下浸水 1,040 戸
平成 14 年 8 月	前線の停滞	126	約 3,690	床上浸水 159 戸・床下浸水 351 戸

【出典；「秋田県消防防災課調べ、水害統計、雄物川洪水資料、秋田災害年表、東北地方整備局 出水資料(S39～40)】

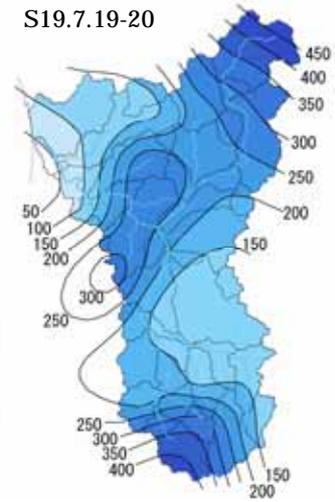
流量は氾濫戻し流量を記載 明治 27 年の流域平均 2 日雨量は、推定値

## 昭和 19 年 7 月洪水

昭和 19 年 7 月 18 日～21 日洪水の原因は前線及び日本海低気圧によるものである。18 日から降り始めた雨量は 23 日まで続き、雄物川最上流部にあたる院内観測所では連続雨量で 40mm を超えた。そのため、雄物川上流部では大きな被害が発生した。



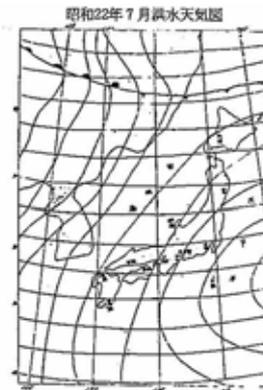
S19.7.19-20



全流域型

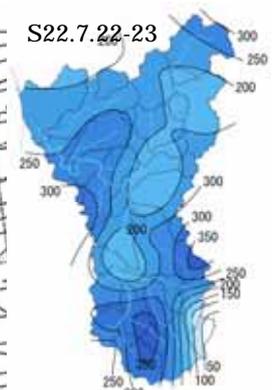
## 昭和 22 年 7 月洪水

高気圧が本州東方海上にあって本邦をおおい、前線帯は満州北部から東に伸びていた。この前線帯上を移動性低気圧が東進するにつれて不連続線を伴った上層の谷が通過し、19 日以来断続的に降雨があり、特に 21 日以後は前線帯も南下し雨量も多くなり、22 日から 24 日までは各地で 200mm を超える豪雨となった。流域内の降雨は、奥羽山脈沿いに強い収れん気流を生じた一様分布型の梅雨型豪雨であったため、幹川及び各支川は一気に増水した。このため、上流部における水位は 22 日夜半から上昇し始め、皆瀬川の岩崎観測所では警戒水位を 2.15m 上回る最高水位を記録した。また、本川の大曲観測所では警戒水位を 4.35m も上回る大洪水となり、雄物川全川にわたり既往の最高水位を突破し、氾濫区域は流域平地部の 60% に及び大洪水となり、耕地、家屋、土木工作物の受けた被害は甚大であり、戦後の混乱期と相まって被害住民の受けた打撃は、非常に大きかった。



昭和22年7月洪水天気図

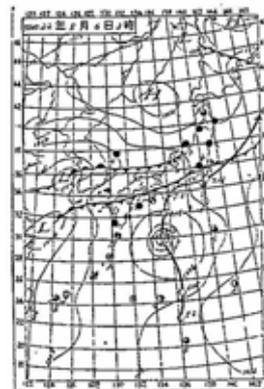
S22.7.22-23



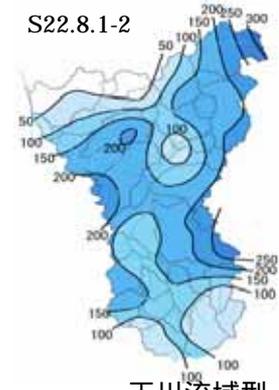
全流域型

## 昭和 22 年 8 月洪水

本洪水の原因は寒冷前線と台風によるもので、降雨は 7 月 27 日から断続的に降り、8 月 1 日から 2 日にかけて満州東部の低気圧が寒冷前線を伴い北東に進み、2 日朝には当地接近して大雨となった。雨量は流域全体で 100mm/2 日以上降雨となり、特に玉川流域をはじめ他の流域でも 7 月洪水に続き大きな被害を受けた。



S22.8.1-2

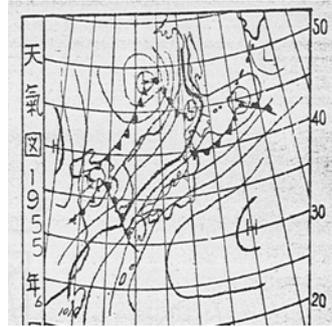


玉川流域型

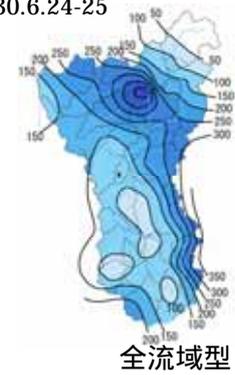
#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### 昭和 30 年 6 月洪水

6 月 24 日から 26 日にかけて、ロシア付近にあった梅雨前線が南下したため大雨となり、大平山から角館を通り横手の東側に至る地域で 200mm 以上を観測した。



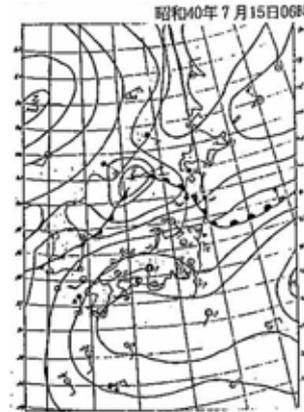
S30.6.24-25



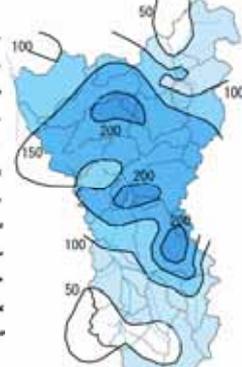
全流域型

##### 昭和 40 年 7 月洪水

7 月 14 日に低気圧は北東進して日本海中部に進み、これに伴い前線も東北地方南部まで北上した。低気圧が進むにつれて、前線活動は次第に活発となり、先行する温暖前線により秋田県南部は 14 日 20 時 45 分頃より雨が降り始め夜半前には一時雷を伴う強雨となった。この時の日最大雨量は大曲 123mm を最高に神代、鹿角でそれぞれ 100mm を超えた。特に梅雨前線が通過した横手市では最多時間雨量 25mm を記録し、横手川及び丸子川で氾濫し、大きな被害を受け、県は 15 日午後、横手市、大仙市大曲、仙北村に災害救助法を発動した。



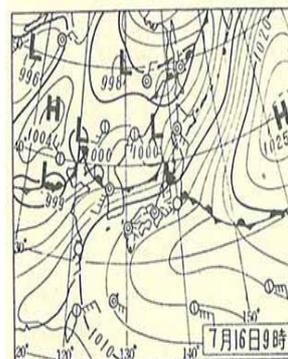
S40.7.14-15



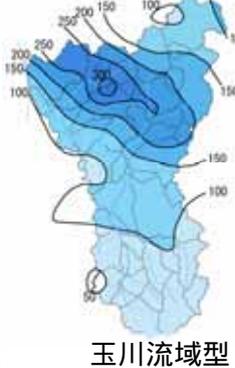
全流域型

##### 昭和 41 年 7 月洪水

7 月 15 日早朝から 16 日にかけて、県中央部と県北の一部を豪雨が襲い、旭川、岩見川など県中央部の中小河川が氾濫した。



S41.7.15-16



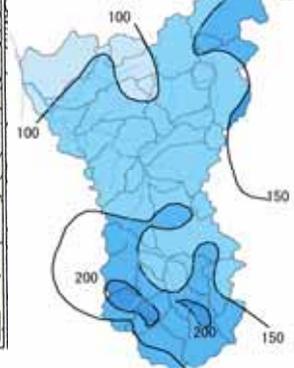
玉川流域型

##### 昭和 44 年 7 月洪水

7 月 27 日夜から 8 月 1 日朝にかけて、前線帯が東北北部から南下したため大雨となり、内陸部では 200mm を越え、岩見川では 521mm に達し昭和 19 年 7 月中旬以降の記録となった。



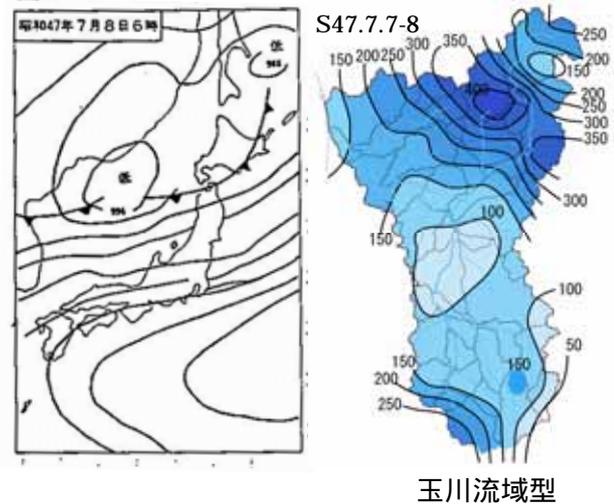
S44.7.29-30



本川上流域型

## 昭和 47 年 7 月洪水

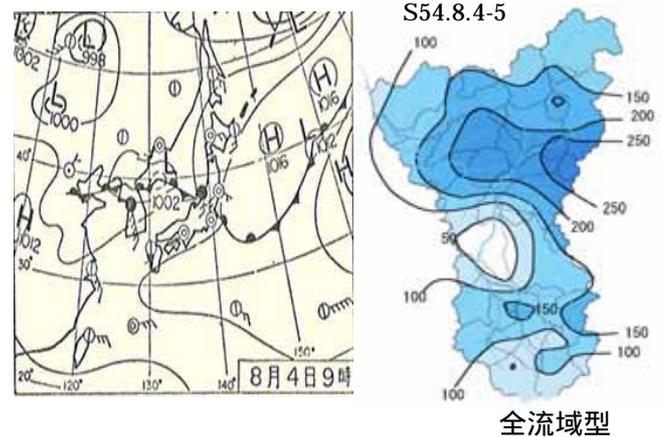
7月7日午前3時には、樺太付近から南西にのびる前線が朝鮮元山沖にある低気圧の中心を経てさらに南西にのびていたが、低気圧の東進接近に伴い当地方では、7日早朝より雨が降り出し、夜にはいって雨はしだいに強くなった。その後も前線は東北地方北部に停滞し、断続的に強い雨が降った。8日の日中は若干弱まったが、夜になって前線が南下し始め雨は再び強くなり、8日夜半から強い雨域は県南部に移った。最多雨域は玉川流域の田沢湖周辺で総雨量410mmを超え、県南部一帯では150mm~200mmを超えた。水位は9日に入りそれぞれピークに達し、被害は無堤部の多い中流部及び大雨が降った玉川、桧木内川流域に集中した。



玉川流域型

## 昭和 54 年 8 月洪水

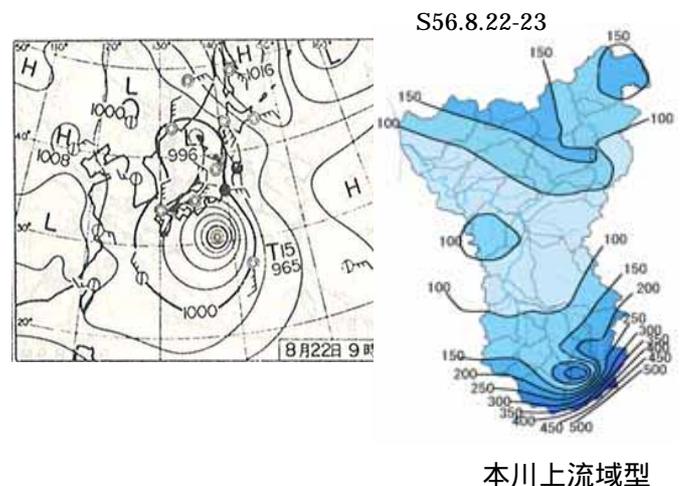
8月4日から7日にかけて、東北北部に停滞した前線と、気圧の谷に伴う日本海低気圧のため大気が不安定となり、4日から5日にかけて県中央部と南部に、6日から7日にかけて県北部が大雨となり、4日間の降水量は角館の272mmを最高に、県内各地とも200mmを前後となり、雄物川、皆瀬川で警戒水位を越えた。



全流域型

## 昭和 56 年 8 月洪水

8月18日から19日にかけて、低気圧や前線が近づいたため県南部を中心に強い雷雨となった。8月21日には東北地方に前線が停滞し、22日には前線活動が活発化して大雨となり、23日には台風15号が房総半島に上陸し、北上したため早朝から風雨が強まり、日中を中心に県内は暴風雨となった。

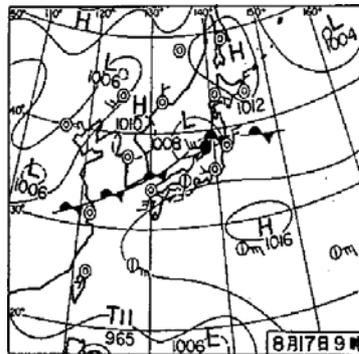


本川上流域型

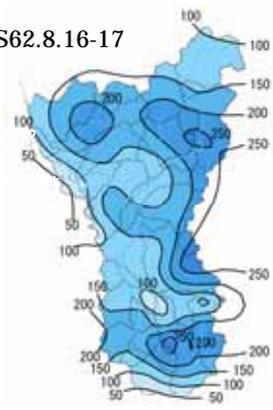
#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### 昭和 62 年 8 月洪水

8 月 16 日午後から 17 日夜半にかけて、秋田県内に断続的な強い雨が降り続いたため、雄物川は急激に増水し、水位観測開始以来の最高水位を各所で記録した。このため、雄物川は氾濫を起こし、河川沿岸の無堤部や低い土地では浸水被害が発生する大洪水となった。



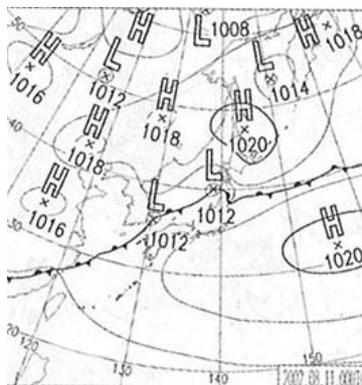
S62.8.16-17



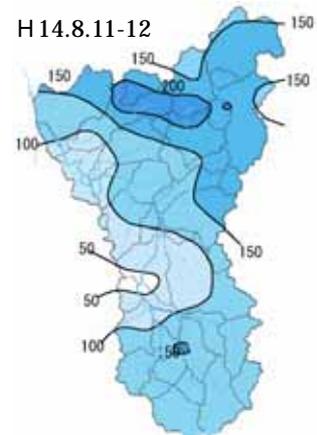
全流域型

##### 平成 14 年 8 月洪水

停滞前線上に発生した低気圧が秋田県沖の日本海をゆっくり北上したため、県内では長時間にわたって雨が降り続き、県中部では多いところで 24 時間に 160mm の大雨となった。



H14.8.11-12



玉川流域型

## 4.2 治水事業の沿革

### (1) 江戸時代の改修

雄物川は全川にわたって蛇行が著しく、洪水のたびに氾濫を繰り返し、甚大な被害を受けていたことから、舟運の便の向上とあわせ、古くから河道の付け替え等が行われてきた。

江戸時代の著名な河川改修としては、下流部にあつては、秋田藩家老梅津半衛門利忠(三代目)が現秋田市仁井田付近を大きく蛇行して流れていた雄物川の河道を、万治2年(1659)に藩の許可を得、15年の歳月をかけて延宝3年(1675)に完成させている。

玉川合流点下流の大仙市神岡町付近において、安永5年(1776)、安永6年(1777)、天明元年(1781)と大洪水に見舞われたことから、天明2年(1782)6月から8月にかけての約2ヶ月で延べ3万6千人余人を動員して、新川を掘った記録が残っている。

上流部では横手市雄物川町沼館付近において元和元年(1615)秋田藩主佐竹義宣が梅津憲忠に命じて河道の付け替え等の河川改修を行った記録が残っている。

・舟運の便を図り、度重なる洪水被害から領地を守るため、隘路となっていた河道付け替えを随所で行った

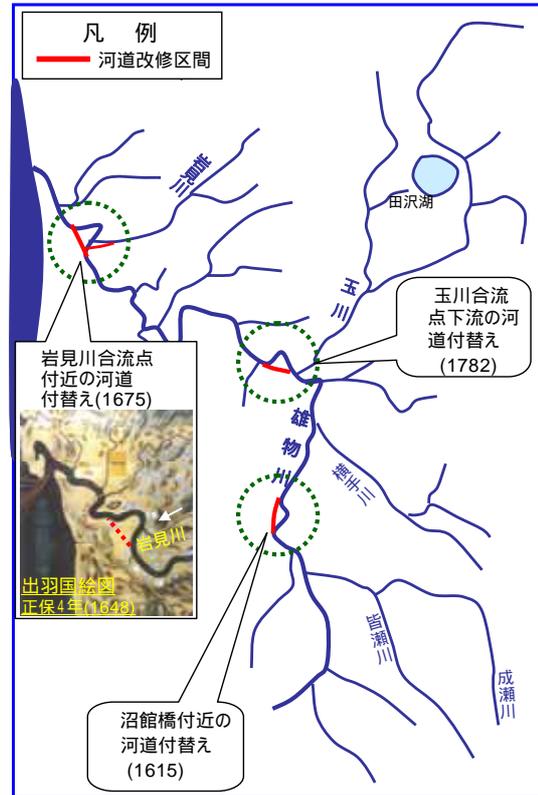


図 4-1 藩政時代の河道付け替え位置図

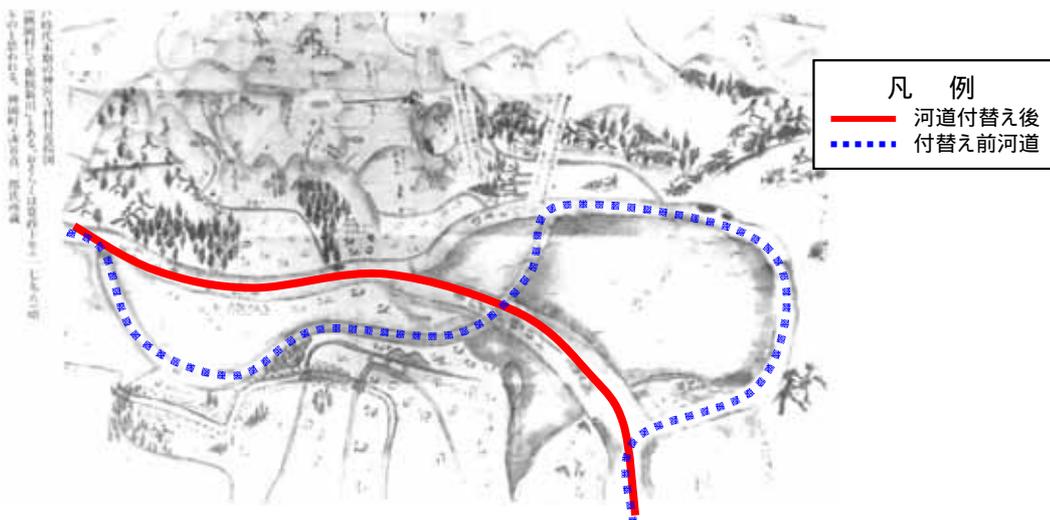


図 4-2 神宮寺付近絵図

#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### (2) 大正時代の改修等

(下流部：大正6年)

明治後半の相次ぐ大洪水を契機として、雄物川下流部における改修計画が第39回帝国議会において採択され、大正6年から事業に着手した。この計画は、秋田市街地を水害から守ることを主目的とし、あわせて河口港の改良を行うもので、雄物川の計画高水流量を明治43年洪水の実績流量を参考に $5,565\text{m}^3/\text{s}$ とし、河口から約10km地点の秋市新屋において約2kmの放水路を開削するとともに、築堤、掘削、護岸等を行うこととした。また、支川岩見川についても、合流形状の改良等を行う計画とした。

本計画に基づく事業は、放水路工事が昭和13年に完成、その他の築堤掘削等を含め昭和24年に完成した。

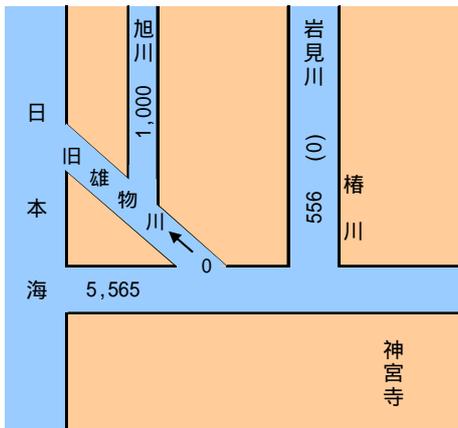


図 4-3 下流部流量配分図

- ・明治43年9月洪水を契機に、河口～椿川地点を大正6年に直轄編入
- ・秋田市及び付近平野の水害を除去し、河口に位置する秋田港（旧名：土崎港）の安定を図ることを目的とし、河口において放水路等を整備



図 4-4 雄物川放水路平面図

(3) 昭和初期～中期の改修等

(上流部：昭和18年)

下流部の計画採択に続き、中上流部についても大正10年に第二期河川として追認されたが、事業着手は、昭和18年から始まった。

上流部は、これまでほとんど改修がなされず、洪水のたびに断続する地先堤防の破堤などにより甚大な洪水被害を繰り返していた支川皆瀬川、成瀬川及び皆瀬川の交流後の雄物川の計約26km区間において計画され事業に着手した。この計画は、計画高水流量を雄物川3,500m<sup>3</sup>/s、皆瀬川2,100m<sup>3</sup>/sとして築堤等の河川改修を行うこととした。



図 4-5 上流部流量配分図（当初計画）

- ・昭和22年7月洪水を契機に、玉川合流点～皆瀬川合流点及び皆瀬川等を昭和18・26年に直轄編入
- ・皆瀬川及び本川では救農土木としての河川改修が開始され、河道疎通能力を向上させる一方、鎧畑ダム・皆瀬ダムによる洪水制御を実施

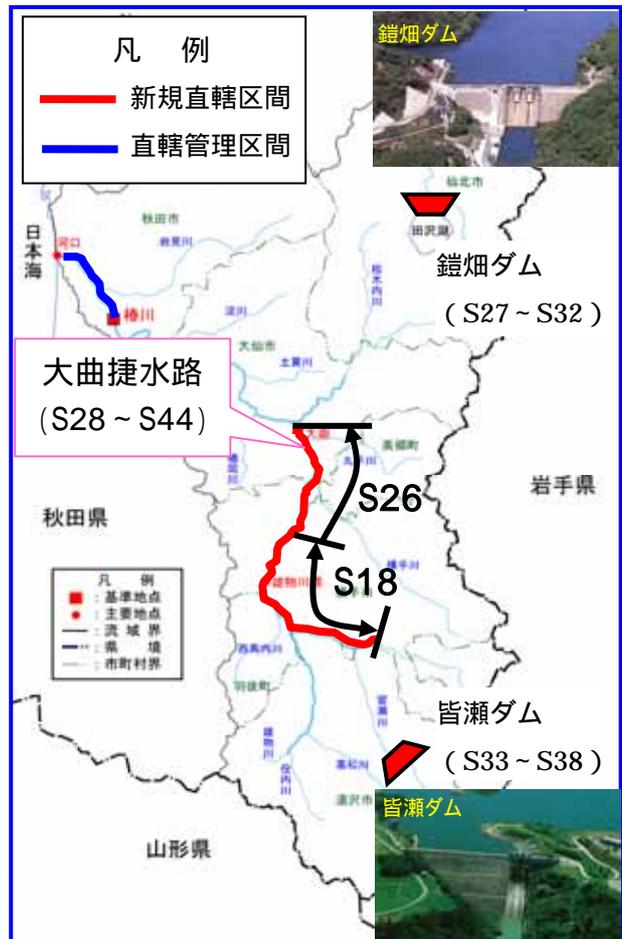
第1次改定計画（昭和26年）

昭和22年7月及び9月の大洪水により中上流部において甚大な被害を受けたことから、抜本的な計画改定が必要となり、洪水痕跡調査等から最大流量を検討し、神宮寺地点の計画高水流量を7,900 m<sup>3</sup>/sとする計画に改定し、築堤等の河川改修を行うこととした。

また、本計画に基づき、著しい蛇行のため浸水被害を繰り返していた大仙市大曲地区において捷水路計画を策定、昭和28年に事業に着手し、昭和44年に完成した。



図 4-6 流量配分図（第1次改定計画）



#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### 第2次改定計画（昭和32年）

第1次改定計画と並行して進めていた雄物川総合開発計画のうち、鎧畑ダム及び皆瀬ダムが具体化したことから、両ダムの洪水調節効果を見込んだ流量配分を検討し、神宮寺地点の計画高水流量を6,800 m<sup>3</sup>/sとする計画に改定した。

この計画は、昭和39年の新河川法施行に伴い、昭和41年に策定された工事实施基本計画に引き継がれた。

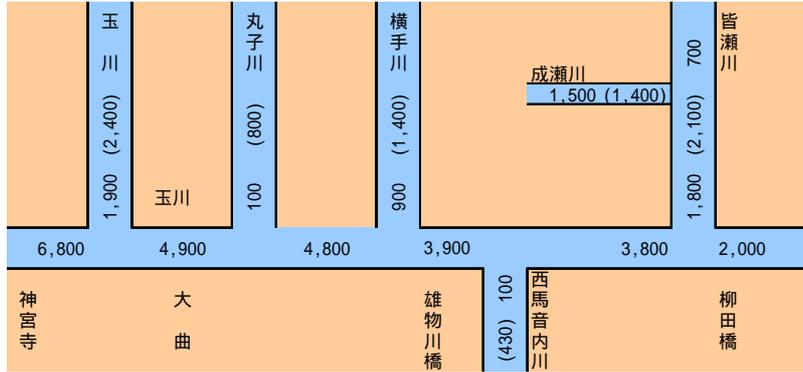
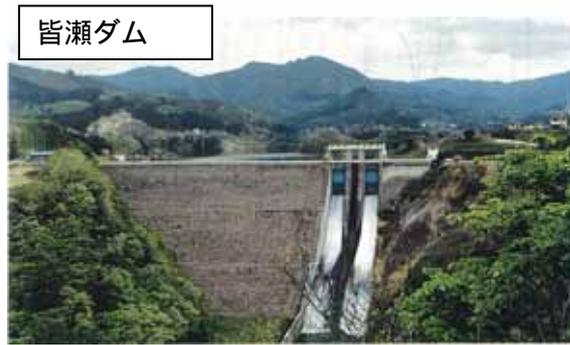
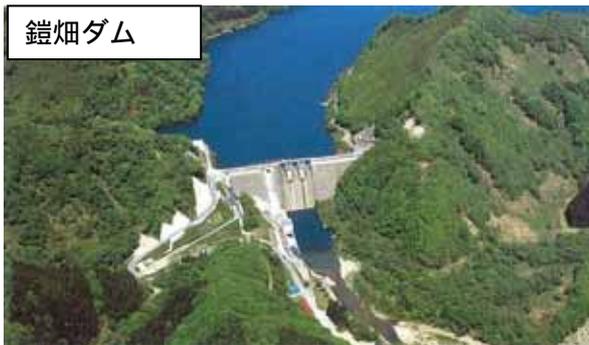


図 4-7 流量配分図（第2次改定計画）



(4) 昭和中期～平成の改修等

昭和44年7月洪水等の発生や流域の開発等を踏まえ、昭和49年に椿川地点における基本高水のピーク流量を9,800 m<sup>3</sup>/sとし、これを上流ダム群により1,100 m<sup>3</sup>/sを調節し、計画高水流量を8,700 m<sup>3</sup>/sとする現計画を決定した。

河川一環の治水対策の視点から、改修で残る区間を直轄化し、玉川ダム事業、輪中堤整備、堤等の改築等を実施した。現在、成瀬ダムの事業化している。

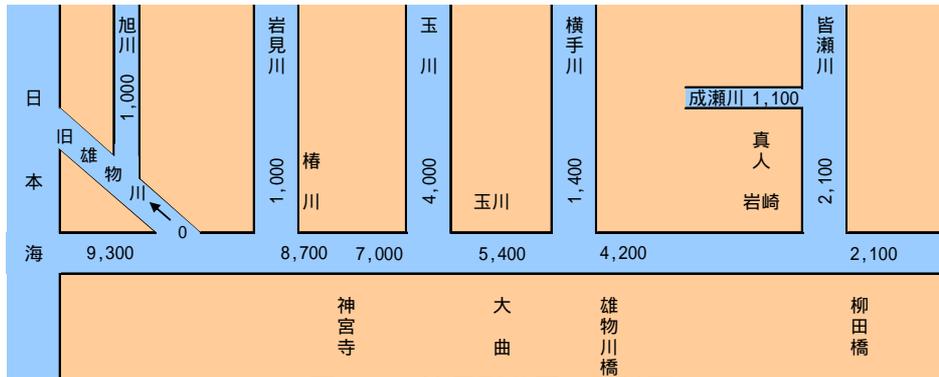


図 4-8 流量配分図(現計画)

- ・水系一貫の治水対策を目指し椿川地点～玉川合流点を昭和44～45に直轄編入し、後に湯沢市街地が位置する皆瀬川合流点上流を昭和54年に直轄編入
- ・早期治水効果発現を目指して輪中堤整備や堰等の改築を実施する一方、玉川ダム・成瀬ダムを整備



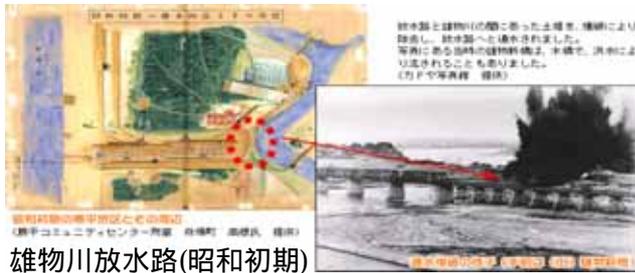
#### 4. 水害と治水事業の沿革

##### (5) 主な治水事業

###### 1) 雄物川放水路事業

雄物川放水路事業は当初、大正 6 年から工期 10 年の計画で着工された。しかし、第 1 次世界大戦後の物価高騰や、大正 12 年の関東大震災、昭和 4 年の世界大恐慌、昭和 6 年の満州事変勃発等による国家財政の悪化により、工事費と工期の見直しが行われた。そして、着工から 22 年後の昭和 13 年 4 月、雄物川放水路は通水した。

雄物川放水路ができたことにより、秋田市に工業地帯が誕生し、新産業都市として飛躍的な発展を遂げた。



###### 2) 大曲捷水路事業

事業は、昭和 28 年度から着手されたが、大川西根村（現大仙市大曲）の耕地 1/5 が新川の用地として失われるため、生活再建のための代替地の確保、開田工事等に日数を要し、実質的に捷水路工事が始まったのは昭和 33 年度からであった。また工事が行なわれた時期は直営施工から請負施工への転換期であり昭和 37 年度は一部、38 年度から全面請負となり、昭和 41 年度に至り低水路の全断面掘削、帯工、姫神橋、揚水施設が完成し、低水護岸も概成され、昭和 42 年 2 月 26 日待望の捷水路通水が実現し旧川仮締切も融雪洪水期直前の 3 月 3 日に無事完了した。



昭和 42 年度以降は、高水敷掘削、旧川締切堤防、護岸工事のほか附帯工事、補償工事の完成に多大の努力がなされ、昭和 44 年 10 月 31 日をもって工事はすべて完成した。大曲捷水路工事は、着手以来、実に 16 年の歳月と、総事業費約 19.6 億円(S60 年換算約 80 億円)の巨費を投じ、掘削土量約 180 万 m<sup>3</sup>、築堤土量約 101 万 m<sup>3</sup>、護岸延長約 6.5 km、帯工、橋梁各 1 ケ所、揚水施設 2 ケ所、樋管 13 ケ所を完工した大事業であった。

捷水路工事が大仙市大曲の水害防御に大きな役割を果たした事は言うまでもないが、全国的に誇り得るのは、捷水路区間の河床が安定していることである。通常はショートカットを行う事によって河床床勾配が急になるため、河床変動の起る可能性があるが、本捷水路の場合、特別の施設を設けないままに安定した河道が維持されている。

いま、新水路は全国花火大会の名所としてすっかり本流に定着し、旧雄物川は、住宅地に生まれ変わり、昔の姿は消滅し水害常襲地帯の面影は全くなかった。

### 3) 強首輪中堤事業

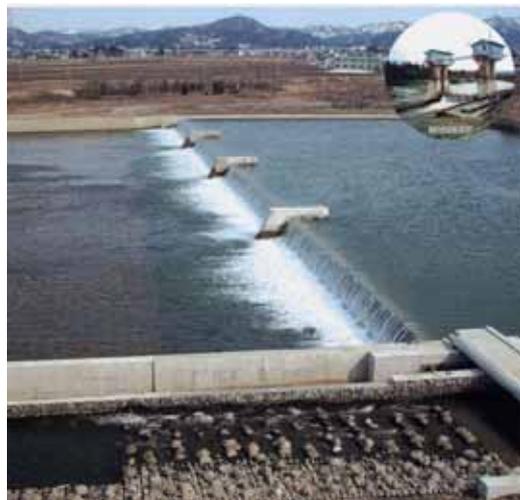
大仙市西仙北強首地区は、雄物川中流部の蛇行帯にある。このため、この地区の河川改修は藩政時代から続いており、昭和 22 年 7 月の洪水では当時の強首村内 486 戸のうち 9 割が床上浸水の被害を受けている。

強首地区を洪水から守るためには、地形のうえから約 15km もの堤防をつなぐことが必要とされている。このため国土交通省では街づくり検討委員会や地域の人々の協力のもとに、効果的な地域防災を目指し、地区全体を三方から堤防で囲んで水害を防ぐ「輪中堤」の事業を平成 5 年から実施し、平成 14 年 10 月に輪中堤は完成した。



### 4) 大久保堰特定構造物改築事業

旧大久保頭首工は、湯沢・雄勝地方の穀倉地帯を支える農業用の取水施設として利用されてきたが、コンクリートで固められた「固定堰」であったためゲートによる開閉ができず、流下能力が不足していることから、洪水の発生時には堰上げにより水位が上昇し、氾濫被害が発生していた。昭和 62 年 8 月に発生した洪水において浸水面積 90ha、浸水家屋 45 戸の被害が発生したことを契機に流水の疎通能力改善と洪水被害の防止を目的に、「特定構造物改築事業」により大久保堰の改築を平成 14 年から実施し、平成 18 年 5 月に可動堰は完成した。堰の改築は、敷高を切り下げ河幅を拡げて、ゲートの開閉ができる可動堰として生まれ変わり、洪水流下・取水位の確保により治水・利水・環境面の問題を解決した。



##### 5) 成瀬ダム（事業中）

成瀬ダムは秋田県の南東端に位置し、雄物川水系支川皆瀬川の右支川成瀬川上流雄勝郡東成瀬村椿川地先に建設されるものである。

雄物川水系の沿川地域は過去において度重なる洪水で被害を被った。このため上流部において昭和 18 年より改修工事が行われてきたが、その後、昭和 19 年、22 年 7～8 月、40 年、47 年と相次ぐ出水により大被害を被った。

また、治水の安全を図るため上流ダム群を含めた洪水調節を行う必要から、治水計画は昭和 49 年 3 月に改定(第三次)された。

しかしながら、近年流域内の人口、資産の増大等による社会、経済発展に伴って、治水の重要性はますます高まり、地域のダム建設要望も強くなった。これらの背景から成瀬ダムは雄物川総合開発計画の一環として建設されるものである。

昭和 58 年度、秋田県において実施計画調査を着手し、平成 3 年度から国直轄事業に編入し、平成 9 年度から建設事業に移行され、平成 13 年 5 月に基本計画が策定されている

